

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号： 34305  
 研究種目： 若手研究（B）  
 研究期間： 2011～2012  
 課題番号： 23720165  
 研究課題名（和文） 21世紀英国作家によるモダニズム文学再構築の意義

研究課題名（英文） The Modernist Canon Revisited

## 研究代表者

廣田 園子 (HIROTA SONOKO)  
 京都女子大学・文学部・准教授  
 研究者番号： 30368550

研究成果の概要（和文）：本研究は、21世紀英国文学を代表する作家イアン・マキューアン及びゼイディー・スミスが相次いで発表したテキストに顕在する、モダニズム文学の再構築という興味深い現象の意義を検証することを目指した。今日の文学・文化研究における最も重要な批評概念の一つであるインターテクスチュアリティを軸に、両作家のテキストを分析することでこれらの「変奏」がもたらすモダニズム文学キャンソンの再解釈の可能性を考察し、学術論文の形で成果を得た。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study is to examine the contemporary British novelists' reworking of canonical literary works of Modernism, and to establish the importance of their achievements. My articles focus on Ian McEwan's *Saturday* (2005) and Zadie Smith's *On Beauty* (2005).

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目： 英米・英語圏文学

キーワード： 英文学、インターテクスチュアリティ、モダニズム

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1983年の論文「オリジナリティについて」において、エドワード・サイードが「作家はオリジナルなものを書くことよりも、リライトすることを意識している」と看破したように、20世紀後半のポストモダニズムの流れの中で「オリジナリティ」の不可能性が主張され、ロラン・バルトやジュリア・クリステヴァによってインターテクスチュアリティの概念が打ち出された。クリステヴァの定義は元来意味論的色彩の強いものであった

が、インターテクスチュアリティの概念はその後今日に至るまで急速に拡大を続け、その定義は多岐に亘っている。

(2) 研究代表者は、ヴァージニア・ウルフ、E. M. フォースター等の作家を中心とするモダニズム文学および現代文学について研究を重ねてきたが、カズオ・イシグロやマキューアンをはじめとする英国の現代作家がしばしば戦間期を舞台とする小説を発表する現象に注目してきた。平成21及び22年度

科学研究費補助金（若手研究B）を得て「現代英国文学における戦間期表象の意義」について考察する過程で、マキューアンが2005年に発表した『土曜日』が、同時多発テロ後のロンドンを舞台にしながら、モダニズム文学のキャノンとも言えるウルフの代表作『ダロウェイ夫人』（1925）を強く示唆する構成になっている点に強い興味を抱いた。研究代表者は、2008年出版の『転回するモダン：イギリス戦間期の文化と文学』（研究社）掲載の『ダロウェイ夫人』に関する論文執筆に際して、モダニズム文学のキャノンに秘められた政治性を改めて認識したところであったが、『土曜日』と同じく2005年にゼイディー・スミスがフォースターの名作『ハワーズ・エンド』（1910）を、自らの小説『美について』において大胆な手法で再構築している事実も鑑み、モダニズム文学を現代に甦らせるこれらのテキストを対象とする新たな研究テーマを構想するに至った。

## 2. 研究の目的

(1) テロの脅威に彩られた21世紀の幕開けにあたり、現代英文学を代表する二人の作家が共に自らのテキストにおいて「他者との邂逅」を中心的命題に据える際に、モダニズム文学のキャノンに深く依拠する道を選択したという現象の意義を検証することが、本研究の主要な目的である。

(2) モダニズム文学、あるいは現代文学という個々の作品群が取り上げられる機会は多い一方で、現代文学におけるインターテクスチュアリティが提示する過去のテキストの再解釈の意義という点については未だ議論は尽くされていない。特に本研究で取り上げる2作品は2005年出版という新しさもあり、批評の数は限られている。また批評家たちは多くの場合、それぞれのモダニズム文学キャノンとの明らかな共通点及び相違点を列挙

するに留まり、インターテクスチュアリティに関する踏み込んだ議論は未だ少数である。

(3) 更に、『土曜日』と『ダロウェイ夫人』の関連についてマキューアン自身は積極的な言及を行っていない一方で、スミスは『ハワーズ・エンド』への依拠を自らのテキスト及び無数のインタビュー記事等において明示している。本研究においてこうした異なるタイプのアダプテーション / アプロプリエーションに関する考察を並置することで、拡大を続けるインターテクスチュアリティの概念への理解を更に深めることを目指した。

## 3. 研究の方法

(1) 倫理的志向を強める現代英国作家の筆頭に挙げられるマキューアンは、暴力と猟奇性に満ちた初期の作品群を経て、1980年代後半からは極めて社会的・政治的色彩の強い小説を発表し続けている。同時多発テロについての彼の発言が多大な社会的反響を招いた事実から、マキューアンが現代における「社会倫理に関する預言者」の地位を獲得したと見なす者さえいる。その彼が満を持して発表した『土曜日』は、彼の倫理的転回の頂点と言える作品である。しばしば「他者の立場を想像することがモラルの根幹である」と述べるマキューアンが本作で提示する「他者」を、『ダロウェイ夫人』における主人公クラリッサの「分身」セプティマスとの関連において、両者に共通する「病」をキーワードに考察することで、『土曜日』におけるインターテクスチュアリティがもたらす意義を具体的に検証するという方法を採用した。

(2) 前項の研究を進めるにあたって、第一次世界大戦の帰還兵セプティマスのシェル・ショックが、『土曜日』においては主人公に襲いかかる「他者」バクスターが苦しむ遺伝病であるハンティントン病に置き換えられて

いる点に注目し、第一次世界大戦後のシェル・ショック患者の詳細、及びハンティントン病に関する情報収集を行った。

(3) スミスの第3作目の長編小説である『美について』は、極めて意識的にフォースターの『ハワーズ・エンド』を現代に置き換えたテキストであり、特に前半は主要なエピソードがほぼ再現されている。スミスは本作をフォースターに対する「オマージュ」と位置づけており、自らの著作の全ては彼に負っている、と述べ、フォースターとの文学的系譜の繋がりを強調している。

従来的には「諷刺」と解釈されかねない大胆な書き換えを「オマージュ」に昇華するためにスミスが選択した手法を検証するために、「語り手の声」に注目することでスミスによる『ハワーズ・エンド』再構築が持つ意義について考察した。

#### 4. 研究成果

(1) 『土曜日』とのインターテクスチュアリティに関連した『ダロウェイ夫人』を巡る研究の一環として、気鋭の研究者マイケル・ウィットワースが発表した最新のヴァージニア・ウルフに関する研究書の書評を平成23年に『ヴァージニア・ウルフ研究』第28号に発表した。歴史的コンテクストを子細に検証しながら彼女の多面性を捉えた本書を批評することは当該研究を発展させる上で、有意義な一助となった。

(2) 『土曜日』と同じく、ウルフ作品をはじめとする過去の文学テキストとのインターテクスチュアリティが顕著なマキューアンの前作『贖罪』(2001)に関する論文「ブライオニーのもう一つの罪：『贖罪』における閉ざされたカップル」を平成23年に発表し、テキストにおける不可避的な「歴史の書き換え」から発生する倫理的葛藤が如何に提示されているかを考察し、複雑な進化を遂げるマ

キューアンの小説世界への理解を更に深め、『土曜日』への発展のプロセスの検証に役立てた。

(3) モダニズム文学のキャノンであるウルフの代表作『ダロウェイ夫人』とのインターテクスチュアリティが顕著なマキューアンの長編小説『土曜日』に関する論文を完成させた。『土曜日』のテキスト構成、およびキャラクター設定の主要部分に見られる『ダロウェイ夫人』との連関について考察し、マキューアンが如何にモダニズム文学の代表作を同時多発テロ後の世界と重ね合わせ、主人公と「他者」との邂逅を変奏したのかという問題を、両テキストに共通する「病」をキーワードに検証する本論文は現在投稿中である。

バクスターが暴力的な「他者」と同時に、深刻な精神障害をもたらす致命的な遺伝病であるハンティントン病に侵されているという設定については、そのテキスト解釈の際立った重要性にもかかわらず十分な議論がなされてこなかった。本稿では、まず『ダロウェイ夫人』におけるセプティマスのシェル・ショックと比較しながらハンティントン病の表象がバクスターの暴力性及びクライマックスでの変容に如何なる役割を果たしているかを検討し、更に『土曜日』で繰り返し言及されるダーウィンとの関連から、この病がテキスト全体においてスーザン・ソントグの所謂「物質的現実」としての機能を果たしていると結論するに至った。更に最後に医師としてバクスターと対峙する主人公ペロウンが、『ダロウェイ夫人』においてセプティマスを責め苛んだブラッドショーやホームズ医師の言わば末裔である点にも着目しながら、ハンティントン病を媒介とするペロウンとバクスターの関係性を再検証し、後者が前者の「分身」となる可能性を検証した。

(4) ゼイディー・スミスが E. M.フォースターの『ハワーズ・エンド』を「アップデート」した野心作『美について』に関する論文を執筆した。

21 世紀ボストン郊外の大学町で繰り広げられる、リベラル左派とネオコンという対照的な視座に立つ2人のレンブラント研究者とその家族たちの悲喜劇的な対立と結合のプロットは、確かに『ハワーズ・エンド』におけるシュレーゲル家とウィルコックス家の構図の「現代版」と要約し得るものである。しかし圧倒的な成功を収めたデビュー作『白い歯』(2000)以来、フォースターよりも遥かにしばしばサルマン・ラシュディと比較されてきたスミスが生み出す、極めて動的なエネルギーに満ちたキャラクター群がエドワード朝英国の枷に縛られないことは、冒頭のエピソード以降徐々に明らかになる。

本稿の目的は、『美について』の語り手が『ハワーズ・エンド』における「フォースターの声」を如何に継承あるいは改変しているかに焦点を当て、スミスによる特異な「変奏」の意義を検証することにある。本論は現在投稿の準備段階にあるが、発表の暁にはモダニズム文学の中では比較的注目度が低く、最近の批評において取り上げられることの少ないフォースターについて、現代文学とのリンクという独自のアプローチによって確かな貢献が為されるものと期待される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

(1) 廣田園子、「ブライオニーのもう一つの罪：『贖罪』における閉ざされたカップル」、『英文学論叢』第55号、査読有、2011年、36-53頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

廣田 園子 (HIROTA SONOKO)

京都女子大学・文学部・准教授

研究者番号：30368550